

日本文芸思潮全史

斎藤清衛 著

日本文芸思潮全史

南雲堂桜楓社

別冊 日本ジャンル別
文学史 **1**

昭和三十八年六月五日 初版印刷
昭和三十八年六月十日 初版発行

定価三二〇〇円

著 者 斎 藤 清 衛

発 行 者 南 雲 正 朗

印 刷 者 三光印刷株式会社

南 雲 堂 桜 楓 社

東京都千代田区西神田二の二九

電話(33)八二三六―八二三九

はじめに

人類の文化にかかわる思想は、その原始時代からさながら大河の急流のように流れてつきない。その移動変化の跡を顧ると、その中には前向きに新しいものを追いつつ走る姿も見え、またうしろ向きに古いものを抱きよせようとする逆の形のものも見られる。しかもその進歩発展や、保守因習の姿勢の間にもおのおの動作における遅速の別がある。人類文化と称しても、政治、経済、科学方面のものと、哲学、宗教、芸術方面のものととは流れの状態と別視する例が多く、哲学、宗教、芸術等三部門における思想の展開は一律でない。さらに解説するなら、文芸、音楽、美術などの側と、思想の側との交渉は一樣でない。音楽や美術やの示す思想というのは、一般文芸の示すそれと様相を異にしている。ある意味で、文芸の含む思想は、哲学宗教と音楽絵画との中間に存するあいこのすがたである。

人類文化史を回顧する文芸は絶えず顕著で重々しい足跡を印してきた。しかしその雑種的性格が、帰趣をはっきり示さないために、しばしば女頭獅身のスフィンクスのように深酷な哲学、神秘的宗教等の思想が、汚れた肉体と混淆している。例えば、日本文学の中で評判の高い、古事記、万葉集、源氏物語、西鶴物などを鑑賞するとわかるように、あまりにそれらの作品は塵埃にまみれている。神仏として讀えようとすると、それが殺人強盗に早変わりしているような矛盾が出てくる。そもそも、現代の人々はこうした国文芸について何を賞美しているのであろうか。こうした懷疑から、一面に嚴肅な自己批判が頭を出してはい

るが、いまだ、はっきり体験の表象として受けとる域に辿りつかず、古典に対しては伝統的作品だから、「拝め、拝め」といい勉めるだけで、信仰宗教者の迷信とあまり隔っていないことが判る。

文芸は、本質として文字を媒介として成立している性質から、中国や欧米やの文学を看るには、一おうそれぞれの文字や言語の知識を持つとか、またすべてが神代以降の伝統文学の佳さを味うために、古代の文学や語法やを学ぶということは、もとより必須肝要である。そこで古事記万葉集の訓点研究や、源氏物語平家物語やの辞句研究やが、古くから発生したことは、更めて説明するを要しないが、とかくその態度が訓詁、考証、書史学に偏して、根本の文芸性を逸脱するものが乏しくない。国語学を専攻して文学を弄んでいる肌合のものにその弊が殊更に顕著である。自らは、万葉集の訓点研究で甘んじているのかもしれないが、万葉歌人の境地は不可解としか考えられぬ。近世の国学者のように、最初から古典を訓むことを以って、国学思想達成の手段と解しているならそれですむだろう。しかし今において回顧反省すると、古今集や源氏物語やを解することに努力を払いつづけたかれらが、どの線までその本質としての文芸美を把みえたかということが問題となる。その左証としては、古今集の歌を中世から近世にかけ、絶対逸品のもののように崇拜し、源氏物語を推讃するものあまって、何十種以上も残されている中古中世の物語類が、悲しくも、その源氏物語の追随模倣から一步も伸び出ていない。かくて、近世の一角を流れていたせせらぎの流が、明治以降西洋文学の影響を被るに到り、われらが現代に見るような国民文学を造りあげたのであるが、なお現代と古典との連繋ははなはだ皮薄である。例えば、近世に多数書かれた黄表紙、洒落

本、滑稽本等を文学として価値あるもののように持ちあげて、国文学史の中に花々しく批判するなどは、純粹の審美觀から出たものでなく、この種の草子物が現代に残されていたという理由のみに係わっている。いわばその点骨董商の趣味から異様なものを蒐集する態度と何等違っていないのである。

文学批評、作品価値の認識で中核となすものは、何といつても作品の持つ審美性である。われわれは、古典や海外文芸やを味うため、方便として時に解釈を重んじ、また作品の發生した環境や時相やを研究することもあるが、それらは結局手段の中の一現象に滞っている。そこを踏みきって、水泳人のように打ちよせる波の中に身を叩き込めないかぎり、文芸の本質は判らない。なんだか、序言が他人に対する警告じみてきたが、自分としては、同じく日本文学の歴史を辿るにしても、ありきたりの文学史の書き振、構想を見すてたい一念を持つているのである。いわゆる客觀ということは、ものの解釈に便宜であるに相違ないが、その点、文芸のありかたは、科学的方法と異っている。論理を超越した、十七音程度の俳句文芸でさえ、ぐっと読者の心を把む妙趣を含めている。

この意味で、本書は、数十種も書かれてきた坊間の文学思想史と、その内容体裁を異にしているかもしれない。従来の日本の文学史の中に、筆太に誇張された作品、作家を無遠慮に削りすてたところもある、無視されていたものを却て有意義に採りあげた部分も出てくる。もつとも、思想の流域を描こうとしたものであるから、素純、感傷、幽玄、寂び、慰み遊びなどという美の理念については、ペンを惜しまず書いたつもりである。原典からの引用文が相当利用されているが、読者側の便を計って、古点の訓点や解釈やは

なるべく豊富にその説明を加えておいた。年代を示す時は、日本の年号と共に、西洋紀元数を書き添え、読者が参照する上の便宜とした。

これを要するに、上流から下流に移ってゆく船舶のように、「流れの潮とともに」心やすらかに読了していただければ、筆者の希望は達するわけである。なお、刊行の予定の遅れたことにつき附記すれば次のとおりである。一昨年であったが桜楓社編集長及川氏に、その原稿をまとめることを承諾したところ、着筆の途中から予想外の煩事がおこり、予定の日を超えてしまった。多分、今日の学界において、部分的のものはあっても、前後十余年の国文学思想の研究をまとめた研究物はないであろう。しかも、一人の生涯五・六十年間前後の時間において、日本文学の中の代表作をどれだけ十分に読みこなし味わうものか、これが先ず疑わしいのである。かりに、「太平記」とか馬琴の「八犬伝」とかを代表の一つとして考えて見ても、これら両書の全部を読了する努力だけでも生涯の精力の消費ははなだしいものである。そんなぐちをこぼすと、なるほどこの際「日本文芸思潮全史」などという題目と、とりくむ計画自体が幻想中の幻想と考えられるかもしれない。ビジョンに過ぎない。しかし、何とか取組んで見なければ結果は判らぬ、うぬぼれはしない。古稀の年令になったものの一つのガンバリを許して貰いたいだけである。

昭和三十八年元旦

著者しるす

日本文芸思潮全史

目

次

はじめに……………一

文芸思潮史の基点……………二

第一章 古 代……………二四

七世紀以前概説……………二五

詩心の萌芽……………(古事記中心)……………二六

靈肉両面、神と人……………(祝詞中心)……………二六

万葉集の成立……………(万葉集中心)……………二六

うたびと……………(同右)……………二七

大陸文芸への愉悅……………(懷風藻中心)……………二八

説話性と笑……………(伝説、説話中心)……………二九

実 感……………(叙事文学中心)……………二九

文芸關聯の思想界……………(大陸思想中心)……………三〇

第二章 中 古……………三〇

公家本位……………(中古の社会相)……………三一

和歌的抒情……………(歌人生活)……………二九

叙べ語る……………(物語文学)……………三〇

女性的自己鑑照……………(女流日記)……………三〇

物のあはれ……………(伊勢・源氏中心)……………	一〇六
をかし……………(枕草子中心)……………	一〇九
すき・あそび……………(神楽催馬楽中心)……………	一一七
民話から……………(今昔物語中心)……………	一二〇
爛熟・放笑……………(狭衣、おちくぼ中心)……………	一二五

第三章 中

世

二五

中世文芸思潮の特異性(新時代相)……………	二七
武美……………(軍記物)……………	二七
伝統美……………(懷想物)……………	二七
自然……………(海と山の文学)……………	二七
幽美……………(幽玄物)……………	二五三
つれづれ……………(徒然草中心)……………	二九
道と型……………(釈教文学)……………	三六
遊心美……………(能楽中心)……………	四七

第四章 近

世

五九

前期時代の概観……………(近世の社会相)……………	七二
復古思想……………(文人中心)……………	七六

第五章 近

代

卑俗的現実……………(草子文学中心)……………	三六
義理伊達と人情……………(浄瑠璃中心)……………	四六
文人的気韻美……………(漢詩和歌中心)……………	四三
さび・からび……………(俳諧中心)……………	四七
通・粹・笑……………(黄表紙中心)……………	五二
なさけ、ことわり……………(人情本、読本中心)……………	五三
時代概説……………(革新期)……………	五五
保守と開化……………(初期小説中心)……………	五六
合理と写真……………(紅露文学)……………	五七
浪漫的と唯美……………(新詩中心)……………	五六
自我と社会性……………(私小説)……………	五八
知性と実証……………(漱石鷗外中心)……………	六六
官能と頽廃美……………(感覚の前後)……………	六八

日本文芸思潮全史

文芸思潮史の基点

人間の社会においては、物質と精神とが対立しているという儼とした事實は現代のところ否むわけにゆかない。人類が地球上で発生した以降、諸方面において築いてきた文化の域はまことに複雑広汎であるけれど、それには物質方面が中心をなしている分野もあるし、また、反対に精神面の濃厚に潜められた分野もある。

たとえば、宗教・道徳・芸術等の諸文化について、その発達がいかに物質面に因縁があらうと、人間の抱く自主性というものを、その間に認めぬわけにはゆかぬのである。さらにいえば、唯物論を承認することそれ自体がわれわれの肉体内にある精神力の結果ともみられる。もとより個人々々の意識の密度は、一歳の幼児と二十歳の青年との間に濃淡や強弱やの懸隔を示している。身体の生長に伴い、意識作用も発達するのが常道であるが、さらに老衰と共にそうした精神力も漸次に弱つてゆくことを免れることはできない。ただ人類は、太古の初発期から、心身ともに健全な状態を少しでも持続することに、あらゆる努力を払ってきた。

現代の文化と称するものは、つまりその努力の集積をさしているものといえるのである。

つぎに精神方面のものを主流とする文化部門を列記すると、ほぼ政治・道徳・宗教・芸術・学術の五種を指摘することができる。その中でも、上の三方面、即ち政治・道徳・宗教が行動意志の文化であるに對して、芸術は情性本位、学術は知識的である。さらにこの五つの方面は、部分的には交叉する部分を持つているのであるが、文学の内容には特に、政治的のもの、人道的なもの、信仰的のもの、思想哲學的のもの——等との關係が濃厚である。そこから、小説ジャンルの中にも、いつか「政治小説」「人道小説」「宗教小説」「思想小説」——というような名称が一般化されてきて、近くは、科学をテーマとした作も出て、科学小説というようなものもあり、文芸の本質とはやや矛盾した小説類型の名さえも出ている。

しかし、文芸の精神と、これら文化の諸分野との間の差別相違については、少くとも、一般芸術における形象という過程や、その背景の部を見すごすことは不可能である。キリスト教の旧約「聖書」や、仏典としての「法華經」やは、思想として、神や仏の功德を讃え、信仰に入ることを入々に勧めてもいるが、その形象方面を見る時、例えば江原小弥太「新約」(大正十年)や、賀川豊彦「死線を越えて」(同年)やと同様に、形象化された宗教思想の書として扱いる範圍にとどまる。従つて、宗教文芸には、いかほど宗教思想がもりこまれていようと、宗教書と違つて、文芸として訴えうる他の方面のあることを見逃すことは出来ない。

この關係は、政治文芸、儒教文芸を初め、一般の啓蒙、談理文学の中にも見られる点であつて、それぞれの精神および思想は、作品とか形象という網目を透して出てきたものであり、作者の思想の宣伝内容は参考

資料にとどめなければならない。例えば、室町時代の文学には、一般に浄土教的思想が濃厚であり、しかもその形象化の不足のために類型に墮した物語も少なくないし、江戸時代のものには、封建的道義があまりに中味に張り出してきた結果、臭味のために折角の小説がまったく愚劣化したものも多い。いずれも、浄土観や忠孝思想や自体における観念的の欠陥なのではない。親鸞の仏教観、京伝や馬琴の孔孟主義にはそれなりにある思想の流が形作られているだけのものである。

しからば、文芸中核の精神とは何であるか。文学精神史とは何を指しているのであるか。これを簡単に説けば、形象化に際し、作者の身構えと直観の消化法とに他ならないのである。この種の思潮の系統については、ほぼ、欧米の文学思潮史の分類に準じ、(一)古典主義思想、(二)浪漫主義思想、(三)現実主義思想に分けるのが便宜である。これらの三大文芸思想が、主義形態として欧州に普及したのは、およそ十八世紀から十九世紀末にかけてのことであるが、漠然とした「古典的」「浪漫的」という類の観念は、すでにギリシャ時代から存在し、「現実的」という心構えも、今の観念に比べると稀薄ではあるが、すでに古代人の文芸観の間々に見られた一つの潮流である。この三思想の特質をあげるとほぼ以下になるう。

(一) 古典主義

表現の範疇を古典の中に置こうという古典主義は、古代の文学発生期間にはなお想定出来ないが、西洋文学でもアテイカの著書の特長が回顧されるほどの四五世紀に下れば仄かながら、その古典主義運動の萌芽

が認められてきている。国文学の歴史でも、万葉集の和歌や、源氏物語の描写やが古典視されてきたのは、十三世紀の初め頃からのことだといえる。しかし、東西ともに古典主義の成立とその発達は古典の表現や修辭やに關係あるがために、万葉集の歌、源氏物語の文脈やの持つ古典性が、それ自らとして、古典主義の大指標のように後世から解釈されたのであつた。ここに、古典性と古典主義思想との混乱が生じがちになったことは止みがたい。

万葉調の歌も、保守による万葉歌の模擬模倣でなく、万葉中心の精神によつて詠われたものであるならば、成果は客觀的現實的のものが主位となるであらう。源氏物語の推讃につれて、中世以降に統源氏物語、追統源氏物語という類の作品が相次いで書かれたが、その多くは浪漫的の小説物語風のものになっている。

㊦ 浪 曼 主 義

十八世紀に欧州を席卷した浪漫主義思想の嵐は、それまでの古典主義のロゴス、悟性絶対論に対する大きい反動の作用であつた。浪漫主義思想の特色といえば、(1)主情的(反主知) (2)幻想夢現的(反悟性) (3)自由の表現(非形式) (4)神秘的(非現実) (5)嘆美的(非客觀)等であつて、古典主義に対蹠する分野が広い。従つて古典主義が民族本位的であるに比して、浪漫主義の方はむしろ個人的であるとも考えられる。作品によつては、古典的と浪漫的との差別の機微は、極めてかすかの間隔である。前述のように、源氏物語の長所は、浪漫的のものを加味した素材に、古典的の表現味を巧に調和させた点にあるともいえる。近世に下つて、本